

## 今はなき学生寮での生活

運動形態外科学講座皮膚病態学分野教授 富田 靖

仙台市内の北に東北大学医学部と付属病院の構内がある。構内の北門を出て北に300mほど歩くと、右手にまるで田舎の古い木造の小学校の玄関を思わせる建物に出会う。この玄関を中央にしてコの字形の2階建て木造校舎のような建物が、昭和舎という医学部の学生寮であった。昭和42年（1967年）4月から卒業するまでの4年間、つまり医学部3年から6年生まで私はここで過ごした。昭和舎は医学部専門課程に進学してきた学生を対象に、1学年100人の学生のうち12人、4学年で計48人を入寮させていた。旧制高校ばりの寮生活が過ごせるためか、私達の頃までは昭和舎への入寮希望者が多く、面接試験を行って入寮者を選考していた。もともとは1学年の定員が10人で、全員個室の寮であったのだが、入寮希望者をきるだけ多入れようということで、定員を12人にし、前半の2年間は2人相部屋にしていた。5、6年生は一人個室になる。2人での相部屋では、半年毎に同学年の人と組み合わせを替えた。2人相部屋の時は、それなりに相手に気を使い、それなり辛いものであり、早く個室になれる5年生になりたいと思ったものであ

る。一見肌が合わず嫌な性格に見えた級友も同室となり、その人の  
生い立ちや環境のバックグラウンドを理解すると、「憎めない良いや  
つ」へと変わっていった。もしその級友と同室にならなければ、理  
解し合った無二の友人にならなかったであろう。言い古された言葉  
だが、「同じ釜の飯を食う」という生活を共にすると、他人でも兄弟  
の様な関係になる。

私の上の学年までは、各学年に20人ほどの社会人や他学部から  
の編入生がいたため、寮にも変わった経歴の人、個性の強い人が多  
かった。全く金のない詩人、当時はやり始めた和製フォークソング  
は音楽ではないと断ずる声楽家。山で死ぬのではないかとばかり山  
にばかり行っていた登山家は、今T大医学部長をしている。音に凝  
って体力に任せて馬鹿でかいスピーカーボックスを作った大工さん  
は、今A大学の医学部長をしている。日本語の教科書は1冊も持た  
ず全て英語の教科書で勉強していた秀才。一升瓶を片時も手放せな  
いアル中。本棚を読破した英語のペーパーブックスで一杯にしてい  
た級友、迷いを生じ大学を中退した級友などなど。この寮での11  
人の同級生、前後3年の計72人の先輩後輩との共同生活は、一人  
で下宿やアパートで過ごす生活では得られないつき合いや、友人が

得られた。

食事は3食付きで、食堂では同学年ばかりでなく、上下の学年の寮生と一緒にの談論風発の会食が開かれた。試験の前日には酔った上級生がストームと称して部屋を襲い、試験官よろしく試験問題を出して我々下級生を苦しめた。昭和40年代は全国の大学紛争華やかかりし時代で、大学の学生寮はどこでも学生運動家のアジト化していたが、昭和舎は伝統的に学生運動とは無関係であった。進歩的な学生もいないわけではなかったが、議論を寮内に持ち込む事はなかった。

光熱費や事務・給食などの賄いの職員は、大学が負担してくれたが、食費、トイレットペーパーなどの消耗品などの経費は、寮生から徴収した経費で自治運営していた。ちょっとした小さな社会であり、共同生活の貴重な訓練になった。

そもそもこの昭和舎は昭和2年に当時の布施現之助解剖学教授（帝国学士院恩賜賞受賞者）の尽力により設立され、昭和15年に医学部北門から北に300mの現在の地に新築移転した。土地653坪（約45m四方）に木造二階建て、6畳の居室29、図書室、娯楽室、卓球室、応接室、事務室、食堂、浴室などを備え、中庭と

テニスコート、この敷地続きに2階建ての舎主の住宅が接していた。舎主は初代が布施教授、その後古賀良彦放射線科教授（藤田保健衛生大放射線科前教授古賀佑彦先生の父上）、浦良治解剖学教授が歴任し、私のいた頃は岩月賢一麻酔科教授であった。全員参加の寮の年中行事に、新入生歓迎コンパ、ダンスパーティー、学年対抗のテニス・卓球・野球大会、ワンデルング（旅行）、寮総会、寮友会（寮の同窓会）、卒業生送別会などがあり、都合の付く限り舎主も出席した。古い舎主ほど学生との交流が密であったようである。

仙台空襲をくぐり抜けた昭和15年建造の建物は、ついに数年前に火災で消失し、それを機会に昭和舎は廃寮となった。跡地には雑草が生え、現在では医学部の駐車場として利用されている。約800人の医学生が過ごした地も今や「つわものどもが夢の跡」となった。